

氏名（本籍地）	長島 達也（東京都）
学位の種類	博士（教育学）
報告・学位記番号	甲第478号（甲（教）第九号）
学位記授与の日付	2021年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当
学位論文題目	現代青年農業者のキャリア形成とその形成を促す学習支援の研究 ——ライフヒストリー法による雇用就農期の学習活動分析を中心に——
論文審査委員	主査 教授 齋藤 里美 副査 教授 藤本 典裕 副査 教授 博士（教育学） 須田 将司

学位論文審査結果報告書〔甲〕

【論文審査】

1. 先行研究との関連からみた本研究の位置

本研究は、農業法人で働く「現代青年農業者」のキャリア形成とそれを促す学習支援（ここでは「農業者育成カリキュラム」と呼ぶ）の役割や意義を、教育社会学の方法のひとつであるライフヒストリー法によって明らかにしたものである。

教育学において、ライフヒストリー法による専門職のキャリア形成研究はここ数年で大きな進展を見せている。とりわけ教師については、姫野完治（2013）『学び続ける教師の養成—成長観の変容とライフヒストリー』、および高井良健一（2015）『教師のライフストーリー—高校教師の中年期の危機と再生』があげられるが、いずれも教師として成長していく過程をライフヒストリー法によって明らかにした労作である。前者は青年が教師を志し、教育実践経験を積む中で成長・発達するプロセスを、後者は中年期の教師における教職アイデンティティの危機と再構築の過程を一人ひとりの教師のライフヒストリーから明らかにしたものとして教育社会学の分野で高く評価されている。

こうした背景には、1980年代以降欧米の教育社会学において、教師の個人史に焦点をあて、教師の生活世界を描き出すことによって、教職生活のリアリティに接近する「ライフヒストリー研究」が生まれたことがあげられる。教師のライフヒストリー研究の方法論を確立した研究者の一人に、グッドソン（Goodson, I. F.）が挙げられるが、かれは、教師が語ったライフストーリーを、研究者が歴史的、社会的文脈に位置づけることによって教師のライフヒストリー研究は成立すると論じた。グッドソンは教師によって語られた人生（ライフストーリー）を歴史的事実と照合し、史料批判を経てより信頼性の高いライフヒストリーとして再構成する方法を示した。すなわち、ライフヒストリー研究とは、語り手によって語られた人生を聴き手である研究者が歴史的、社会的文脈に位置づけて再構成する試みといえる。

農業教育学の分野においても、こうしたライフヒストリー研究は少ないながらもなされてきた。安藤義道（1999）『現代農民のライフ・ヒストリーと就農行動—「納得論理」型農民教育の創造』がそれである。安藤は、現代日本の農政の最重要課題のひとつに農業の担い手不足があると指摘し、インタビューと生活記録にもとづくライフヒストリー研究によって、現代農業者の就農行動を明らかにした。安藤によれば、1980年代前半までの農業者育成は、家業としての農業を継続するために「跡取り」に就農を促し、農業者として育てようとする伝統的農業者養成であり、これはいわば他者からの「説得」による養成であったという（安藤 1999: 342）。しかし、1980年代後半から行われた安藤のライフヒストリー研究によって、この頃から就農行動も就農意識も農業者一人ひとりで異なり、青年農業者が育つ過程に多様性が生まれてきていること、また青年農業者が育つために必要なことは農業者自身の「納得」であり「自己形成」であるということが示された。ただし、2010年以降になって増え始めた農業法人とそこで雇用されることによって新規就農し、やがて農業者として独立していく新しいタイプの「現代青年農業者」（ここでは非農家出身であり、農業法人に就職することで就農した39歳以下の青年のことをこう呼ぶ）は、安藤の研究当時はまだ広く登場しておらず、2010年代以降、農業教育学の分野において「現代青年農業者」のキャリア形成の過程をライフヒストリー研究によって明らかにす

ることがあらたな課題として立ち上がってきた。こうした課題に応えることをめざしたのが、長島達也氏のこの研究である。

なお、人間の「職業的発達」の過程については、スーパー (Super, D. E.) の職業的発達論によって示されたように、児童期における職業への関心の始まりから、青年期におけるさまざまな探索と進路選択、職業生活の開始・展開による自己理解や適応などを経て、成人中期、成人後期における自己概念の強化へと進むことが知られている。とりわけ青年期には、職業生活に適応するために必要な能力だけでなく、その人独自の職業観が形成され、職業的自己実現を目指すことがアイデンティティの形成に大きな役割を果たしていることが指摘されている。こうした職業的発達を教育的営みとして体系化し、研究対象とする試みは職業教育学や発達心理学等、さまざまな領域でなされてきた。とりわけ職業教育学（学会としては「日本職業教育学会」、旧名称は「日本産業教育学会」）は、1990年代以前は主に中学校・高校、高等専門学校または大学のほか各種学校や専修学校、職業訓練施設、企業等における職業教育全般を研究対象としていたが、1990年代以降は、このころ急速に普及した「キャリア教育」を研究対象に加え、職業的発達をとらえる総合的学問領域となっている。ただし、ここで加わった「キャリア教育」は、中央教育審議会答申が「キャリア教育」を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる教育」と定義したことで学校教育の概念として定着したため、企業等において展開される職業的発達およびその支援のプロセスは一般に「キャリア形成」「キャリア開発」と呼ばれることが多い。本研究が対象とした「キャリア形成」もその中核概念は職業的発達であるが、他方で、成人の職業的発達とその支援の意味をとらえるには、本人のライフヒストリー全体が大きく影響していることから、本研究では「キャリア」という概念を、ホール (Hall, D. T. 1976=1993) の定義を援用し、「個人の生涯を通じて、仕事にかかわる諸経験や諸活動に関連した態度や行動の、個人的に知覚された連鎖」とやや広く定義し、分析に用いている。「キャリア」概念をめぐるこうした問題意識は、筒井美紀 (2017) による「学習者アイデンティティ構築の過程そのものを教育社会学の研究課題とすべき」との提言と通底している。

こうしたことから、長島氏の研究の独自性は以下の2点にあるといえる。

- ①この10年、農業教育学のなかで研究課題となっていた「現代青年農業者」の「キャリア形成」（広義のキャリア形成）の過程と農業者育成カリキュラムの意義をライフヒストリー研究によって明らかにしたこと。
- ②農業者育成カリキュラムを「現代青年農業者」の「キャリア形成」という視点から問い直し、職業教育論のひとつとして構造化したこと。

2. 論文の概要

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 本研究の目的と背景、意義

第1章 本研究の課題と方法

第2章 農業法人化政策の歴史的変遷と農業者育成カリキュラム

第3章 現代青年農業者のライフヒストリーと雇用就農以降の学習活動

第4章 現代青年農業者の就農動機と雇用就農前の学習経験

第5章 現代青年農業者に対する農業法人の学習支援

第6章 現代青年農業者の雇用就農以降のキャリア形成

終章 本研究の成果と課題

引用・参考文献

序章では、本研究の目的と背景、意義が述べられている。具体的には、2000年代に入って農業法人が就農を希望する非農家出身青年の雇用と育成に一定の成果を上げ、青年農業者の確保・育成の担い手として脚光を浴びる一方で、離職する青年も見られることから、青年農業者育成の観点からのキャリア形成研究が急務であること、またそのための研究方法を確立して、農業者のキャリア形成にむけた教育学の観点からのアプローチが不可欠であるとの研究課題が示されている。これらの課題に応えるため本研究では、農業法人がおこなう育成・支援機能を農業者育成カリキュラムと位置づけ、こうした農業者育成カリキュラムによって「現代青年農業者」のキャリア形成がどのように促進されるのか、また課題は何かを明らかにするとともに、今後の農業者育成カリキュラムの全体像を再構築することを目指したものであることが述べられている。

第1章では、先行研究の到達点が示されると同時に、そこから導きだされた本研究の課題と方法が述べられている。とりわけ、従来の研究が農業者のキャリア形成や農業法人によるキャリア形成支援を取り上げてはいるものの、これらの研究には「現代的青年農業者」のライフヒストリーとキャリア形成の関連についての着目がほとんどないこと、したがって「現代青年農業者」が職業的発達をとげていくプロセスをライフヒストリー研究によって解明することが不可欠であること、が指摘されている。

第2章では、農業者育成カリキュラムが求められるようになった歴史的背景をさぐるため、農業法人化政策と青年農業者の就農行動の歴史的変遷が整理されている。1960年代に誕生した農業法人化が本格的に活用されるようになったのは農業人口が減少した1990年代からであること、またこの頃から事業継承と経営基盤強化のために農業法人が活用されるようになったこと、さらに2000年代からは多様な農業者の確保・育成のための施策として法人化政策が進められてきたことが、政策文書、公的データ、先行研究等から明らかにされている。また、青年農業者の就農行動については、新規就農者調査などのデータにもとづいて、「Uターン青年農業者増加期」「新規自営農業就農青年減少期」「青年農業者就農形態転換期」に時期区分し、1990年以降の就農行動が時期に応じて変化してきたこと、また非農家出身青年農業者の確保・育成・定着に農業法人が一定の役割を果たしたことが統計的に示されている。こうした歴史的分析は先行研究では明らかにされてこなかった本論文の特徴である。

第3章では、長島氏の聞き取り調査にもとづいて、「現代青年農業者」のライフヒストリーと雇用就農以降の学習活動が解明されている。長島氏は、青年農業者の雇用・育成に一定の成果を上げている農業法人を取り上げ、法人の代表者およびそこで農業者として学び後に独立を果たした3名に半構造化法による面接調査を行い、ライフヒストリーとして記述した。本章では、「現代青年農業者」のライフヒストリーの全体像のなかに、青年農業者の職業的発達と農業法人での学習経験が位置づけられ、雇用就農以降の学習活動との連続性が明らかにされている。とりわけ、かれらが雇用就農期に経験した危機とその克服がその後の農業者としての成長と結びつけられ論じられており、文章は精彩に富んでいる。

第4章では、雇用就農前の経験に焦点をあて、「現代青年農業者」の就農動機や農業者観の特徴および雇用就農前の学習経験と雇用就農後の学習活動との関連が解明されている。長島氏は、第3章で示したライフヒストリーにもとづいて、生育史や就農前の学習経験などによって就農動機や農業者観

がどのように形成されたか、またそれらが雇用就農前・後の学習経験とどのように関連しているかを分析し、「現代青年農業者」の特徴として、就学期のスポーツや学業での挫折やその克服経験が「独立自営」のための就農に、また「自己実現志向」や「事業志向」の農業者観につながる場合があることを見出している。

第5章では、雇用就農期の経験に焦点をあて、「現代青年農業者」に対する農業法人の学習支援、すなわち農業者育成カリキュラムの成果と課題が明らかにされている。とりわけこの章では、成人教育論の分野で「自己主導型学習」の重要性を強調したノールズ (Knowles, M. S.) のアンドラゴジー (成人の学習を援助する技術と科学) の枠組みを参照軸に分析を行った。これによって、利益を志向する法人とキャリア形成を志向する青年農業者との間にはパワーバランスをめぐる緊張関係が存在すること、またこうした緊張関係のもとにおいても成人学習特有の「自己主導型学習」が志向され、緊張の調整と克服がなされることで農場長および独立に必要な調整能力、経営能力、指導力が獲得されていること、という特性がみられることが明らかになっている。

第6章では、雇用就農以降の経験に焦点をあて、「現代青年農業者」のキャリア形成の特徴が明らかにされている。ここで長島氏は、青年期のキャリア形成を支える農業者アイデンティティの発達と農業者アイデンティティの主要な構成要素である農業者観の変容に着目した。その結果、雇用就農期の「労使共同・自己主導型学習」によって農業者としての知識・技能や自信を獲得した後、農場長としての組織運営や近隣農家との交流・協働を通じて他者からの承認を得るなかで、農業者観は「自己実現志向」から「社会貢献志向」へ、また「生活志向」と「事業志向」の両面を備えるようになり、かれらの農業者アイデンティティが再構築されることが見いだされた。ここにも本研究固有の研究成果が認められる。

終章では、「現代青年農業者」のキャリア形成とそれを促す学習支援の研究によって得られた成果を総括するとともに、農業者育成カリキュラムを「現代青年農業者」のキャリア形成という視点から問い直し、職業教育論のひとつとして構造化している。従来の農業者育成カリキュラムは、農業者に求められる知識・技能の獲得にその中心があつたが、新規独立就農をめざす「現代青年農業者」の育成のためのカリキュラムには、雇用就農期に知識・技能の獲得のみならず農業者アイデンティティの発達を促す学習支援が求められること、またそのためにも、就学期からの職業教育やキャリア教育との連携や体系化が求められることなどが示されている。

3. 審査の概要

本論文の特徴を一言で述べるとすれば、近年の農業教育学のなかで研究の必要性が言われてきた「現代青年農業者」のキャリア形成の過程を、ライフヒストリー研究によって明らかにしたことである。そのことによって、従来の農業教育学で取り上げられてこなかった対象（「現代青年農業者」）の姿をライフヒストリー全体にわたって照射し、かれらが非農家出身でありながら農業という進路を選択し、農業法人の支援を得ながら成長し、農業者として自己形成・独立していく過程を明らかにした。

また、その研究方法として、成人学習者（ここでは「現代青年農業者」）自身の語りの中から職業的アイデンティティの変容プロセスを析出するという、本研究の目的にかなった手法が採られている。

入念に準備された聞き取り調査と緻密に編まれたライフヒストリーは、社会学的調査としては十分な学術的水準を備え、かつ論文は一貫した視点をもって構成されており、本研究に体系性・一貫性を認めることができる。とりわけ、第2章および第3章で背景となる史資料を提示し、それを基礎デー

タとしながら第4章、第5章、第6章の分析を進め、終章で農業教育論全体の再構築および農業教育体系の構造化を行っているなど、論文の完成度は高い。

本論文の学術的意義としては、「現代青年農業者」が独立に至るまでの職業的アイデンティティの発達過程を明らかにすると同時に、それを支援する農業法人の農業者育成カリキュラムの意義を明確化した点をあげることができる。かつてインフォーマルなかたちの「形成」に依存していた農業者教育であるが、農業法人による農業者育成のカリキュラム化によって農業者教育がどのように促されたか、また課題は何かを明らかにしたことは、農業教育学にとって大きな一歩といえよう。本論文の一部を構成する論文がすでに学会誌『産業教育学研究』（現『職業教育学研究』）および『日本農業教育学会誌』等に掲載されており、こうした点は学会においても一定の評価を受けている。

最後に、今後さらなる研究の深化を期待するとすれば、ライフヒストリー研究をさらに発展させ、就学期からの職業教育やキャリア教育との連携の具体化に向けて、学校教育分野を視野に入れた農業者教育学を構築していくことであろう。

なお、口述試験においても、研究史における本研究の成果と課題についての的確な理解、および学術および社会貢献に向けた真摯な研究姿勢が確認されている。

【審査結果】

以上のように、長島達也氏の論文は、農業教育学において未開拓の領域であった「現代青年農業者」のキャリア形成に光を当て、「現代青年農業者」の育成カリキュラムの成果と課題を明らかにしたという点で研究史上の欠落部分の補充に成功しており、高く評価することができる。また本研究によってなされた農業教育論の再構築と農業教育体系の構造化は、農業者の確保・育成・定着という社会的課題の解決に大きく貢献するものでもある。

こうした学術的意義および社会的意義に照らし、また、文学研究科（教育学専攻）の博士学位審査基準に照らして、本研究は博士学位論文として妥当な研究内容であると認められる。

本審査委員会は、長島達也氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。 以上